課題解決のための品目転換で経営安定
～人とのつながりを基盤として～

南知多町　大岩辰男さん
花き（多肉植物、観葉植物）

【平成 31 年 1 月 28 日掲載】

知多半島の先端にある南知多町で多肉植物などの観葉植物を生産する大岩辰男さんをご紹介します。大岩さんは、長年農業経営士として地域を牽引しています。

就農と同時にデンマークカクタスの生産を開始

大岩辰男さん

大岩さんは、農業系の短大を卒業し、シンビジウムとデンマークカクタスを栽培する農家で１年間研修後、昭和 57 年、22 歳のときに就農しました。当時大岩家では露地みかんや観葉植物を生産していた中、就農した大岩さんは、研修中から着目していたデンマークカクタスを導入しました。

デンマークカクタスで経営が発展

昭和 50～60 年代は、シャコバサボテンの改良種であるデンマークカクタスの人気が高まり、生産面積が急速に増加した時代で、知多地域は平成元年～10 年代頃の最盛期に年間生産量 130 万鉢、全国シェア３割以上を誇る大産地でした。大岩さんもこの流れに乗って規模拡大し、施設面積を昭和 62 年に 4600㎡まで増やしました。作れば売れる時代で、両親と妻の京子さんにパートも入れて、最盛期には、5.5 寸鉢中心に４万鉢前後を出荷しました。

大岩さんの所属する内海花き部会は消費宣伝活動にも力を入れており、大岩さんは役員として、メディアに花を提供して宣伝してもらったり、市場で直接買参人にアピールするなど、部会とともに活動しました。

さらに、今では一般的に行われている事前の単価契約販売を、先進的に取り入れて実施しました。当時は日々のセリ販売が主流でしたが、時期により単価が上下することに疑問を感じたことと、地元でもっと売りたいという思いから、名古屋市の仲卸に働きかけて始めました。出荷時期の２か月間、安定した品質のものを安定した価格で売れることができました。

デンマークカクタス

品目転換を決意

デンマークカクタスのおかげで、市場や仲卸の担当者と人間関係を構築でき、安定した収益を得ましたが、デンマークカクタスは７月から年末までの長期に渡って繁忙期が続き、家族労働を中心とした経営では肉体的な負担が非常に大きいものでした。

また自分自身とともに両親も年を重ねていき、年々作業が大変になったことから、今しかないと平成 15 年、43 歳で品目転換を決意しました。自分の家の労働力や栽培環境、自分の手に合った品目を探すため、市場に行き商品を買ってきて試作し、良さそうならその生産者を訪ねて栽培方法を教えてもらったりして品目の候補を絞りました。

多肉植物でも生産の姿勢は変えない

「桜花月」に花の付いた状況

試験的に導入した相当な数の鉢物品目の中で、その後の経営の大きな柱となったのが「桜花月」という多肉植物です。「金のなる木」として知られるこの植物は、花付きで販売することが必須となりますが、いっせいに花を付けさせるには施肥や摘心、灌水などの栽培管理で様々なポイントがあります。大岩さんは、出入りの業者を通じて渥美半島の生産者を紹介してもらい、京子さんと共に訪問して、作り方の教えを請うとともに、生産させてほしいと頭を下げてお願いしました。品種登録されていない生産・販売の制約のない品種でも、大岩さん夫婦は「先駆者に敬意を払いたい」と礼を尽くしました。

ちょうどその頃、デンマークカクタスをよく買ってくれていた買参人が、かつて大岩さんにとてもお世話になったことへの感謝と、品目が変わっても良い物を作ってほしいと話していたことを人づてに聞く機会がありました。多肉植物は、灌水が少なく、低い温度でも管理でき、手をかけなくても育つようなイメージがありますが、やはり良い商品を安定的に生産する姿勢は大事にしなければならないと大いに刺激を受けたそうです。

現在、桜花月や斑入り花月、シェフレラ・ハッピーイエローなど４品目を生産しており、労力分散や省力化により、3600m^{2}のハウスを夫婦２人で管理しています。これまで築いてきた信用や人との繋がりを基盤に、流行りを追うのではなく自分に合ったものを大切にする方針により、市場でも高い評価を得ています。

左「斑入り花月」、右「シェフレラ・ハッピーイエロー」

農業経営士として地域を支援

平成 20 年に農業経営士に認定され、今年で 10 年になります。近年は花き業界は需要の低迷や輸入の増大により大変厳しい時代であり、この地域の花き生産もかつてほどの勢いはありません。その中でも後継者が他産地より多く、地域の農業のうち大きな割合を占める花き生産を農業経営士として支援しつづけています。また、大岩さんには後継者がいないため、今の技術を誰か地域の若い人に譲りたいと話してくださいました。植物の生産に対するお二人の心意気もぜひ引き継いでいってほしいものです。

「手をかけただけ植物が応えてくれる」と話す京子さん（右）

執　　筆：農業経営課
取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2019, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.